

院長 和田誠基が

糖尿病・内分泌の患者様を  
診察するわけ

## 第七部

### メルボルン生活の思い出

前は妻雅代にメルボルンでの生活を振り返ってもらいました。今回は私なりに2年間の経験を回想します。300坪の家は豪勢でしたが、自宅と周囲の環境は住人に義務づけられており、週末の芝刈り、プールの清掃は大変でした。メルボルンの天候は1日に四季があると言われるほど変化に富み、服装には大変気をつかいました。

研究プロジェクトはマウスでのヒトカルシトニン受容体抗体作と、受容体脱感作メカニズムをmRNA発現からアプローチする探索でした。後者の研究は米国内分泌学会でNew Investigator Awardを受賞し、機関誌Endocrinologyに掲載され、帰国後は医学博士を授与されました。プロジェクトはほぼ順調に経過し、帰国してから掲載されたものを含めて4つの論文を報告できました。

異国の地でプライベートを充実させ、何を体験できるかということも大きな課題でした。人生の中で2年間を他国で過ごせることはないだろうと想定し、月に1回は可能な限り遠方に出かけました。



ニュージーランドには2回（メルボルンからは近く、非常にリーズナブルな値段で旅行できます）、タスマニア、シドニー、ブリスベン、エアーズロック、アデレード、グレートバリアリーフなどなどです。車での1000km走破なども日常でした。ある時シドニーに向かう最中にはブッシュファイヤー（山火事）に遭遇し、爆撃を受けているような空の下をくぐりました。またグレートバリアリーフの島で過ごした1週間は食事やアクティビティが全て含まれており、妻も人生の中で最もリラックスした期間だと言っておりました。概ね楽しかった旅行ですが、ニュージーランド・クイーンズタウンではキャンピングカーを事故で大破させました。全



員前に座って、シートベルトをしていたため大事には至りませんでした。大きなショックを受けたものです。原因は信号のない場所で車列が急に止まったからですが、羊が横切っていたという理由を後ほど聞きました。メルボルン滞在中も数回米国骨代謝学会、内分泌学会に出席しましたが、オーストラリアからアメリカは地球の裏側に相当し、非常に長い時間をかけたフライトだと感じましたが、同時にそうしてコミュニケーションをとることの重要性を認識しました。私たちがメルボルンで過ごしていた最中に阪神淡路大震災があり、防衛医大同窓生が現地で活躍している様子を見て、異国の地で過ごし申し訳なく思っておりました。

2年間の留学が終わる時に陸上自衛隊衛生部より連絡を受け、帰国後は防衛医大の教官として後輩の育成に従事することとなりました。北海道や九州などでの辺地を想定しておりましたので意外でした。



次号では防衛医大教官および自衛隊衛生学校で勤務した2年間を振り返りたいと思います。